

クララとヘボンの「ヘボン塾」

石川 潔

1. 神奈川宿時代に

1859年10月18日横濱に上陸したヘボン夫妻は神奈川宿内の〈成佛寺〉を仮寓として日本での生活を始めた。ヘボンは米国長老教会派の医療宣教師。それより2週間ほど遅れて、米国オランダ改革派の宣教師 S.R. ブラウンらが横濱に到着。当時神奈川宿内の寺院のほとんどが外国公使領事館及び外国人宿舎として使用されていた。この寺の借用については、ヘボン自身で折衝したのではなく、米国領事館が神奈川奉行所に申し入れて提供を受けたのである。幕府は〈体の大きな外国人〉が生活し易い建物としては〈仏教寺院〉が適当として〈お上の命令〉で、仏像・仏具を片付けさせて調達していた。しかし〈家賃〉は適当額を定めて借り手に支払わせていたようである。因みに〈成佛寺の家賃〉は月に16ドル(12両)「1両を現在価で8万円に換算すると96万円」本堂の広さは49坪、ヘボンは是を大小8部屋に仕切った。「正面の3部屋をひとつにして日曜礼拝のための部屋となる」と報告している。ブラウンは隣接する〈庫裏—住職の住居〉に住むことになり、本堂より少し大きい広さで、家賃の半額(8ドル)を負担することになった。

1859年11月13日の日曜日には日本におけるプロテスタント教会最初の主日礼拝がもたれた。出席者は、S.R. ブラウンに同行来日した宣教医のシモンズ、米国通信社特派員のフランシス・ホール、そしてヘボン夫妻。又、神奈川、横濱に居住する領事館・商館の関係者で、おそらく十数名程度であったと考える。日本での最初のプロテスタントの礼拝は〈仏教寺院の本堂〉で行われ、聖書朗読、讃美歌が寺院から流れたことは記念すべきことである。ヘボンや S.R. ブラウンは近所を歩いて、できるだけ多くの日本人に挨拶をし、言葉を交わす努力をしている。ヘボンは自分の名前と同時に医者であることも

紹介していった。英語の Hepburn という発音が日本人には「ヘボン」と聴こえた。

1861年4月、改革派が借りていた〈宗興寺〉で施療—Medical service given gratuitously)を開始した。当初は江戸から〈神奈川宿に泊まっての〉患者が多かったが、やがて近隣、周辺の住民も増え、一日に30人を超すようになったという。何しろ、診察を受け、薬をもらい、場合によっては手術を受け、入院してもすべて無料である。しかも先端の西洋医学による診療であり、片言であるが、日本語が通じる親切な外国人医師である。診療を受けた日本人の全てが〈外国人に対する恐怖心〉は払拭されていったようである。このような状況で患者が増えていったので、週に3日間の診察としたが一日に100~150人の来診があったという。しかし、8月のとある日(施療開始から4か月過ぎた頃)、奉行所は突如この施療所を閉鎖した。寺の周りを高い塀で囲み、寺の入り口に門番を配置して患者の来診を禁止する処置をとった。これで〈施療所は5か月弱で閉鎖せざる〉を得なくなった。この間にヘボンは約3500人に医療を施して〈カルテ〉を書いたという。

2. 神奈川でのクララのクラス

1861年6月22日付けのヘボンのミッション本部への報告書の中で「日本語の教師と私どもの下僕の息子とがクラスをつくって、妻が毎日午後1時間又は2時間英語を教えるのです。二人とも辛抱づよく勤勉な生徒です。」と書いている。二人だけのクラスで、このクラスがどのくらいの間続いたかの記録はない。しかもクララは間もなく帰米しているので、すぐに消滅したと思われるし、人数は増えたのかどうか—などの疑問だけが残るだけである。従ってこの〈神奈川宿でのクラス〉をヘボン塾の出発点と考えることはできない。

1862年11月の下旬に、供まわり従えた名の高官が幕府の委託学生として、ヘボンに英語の教授を受けるため来訪して来た。彼らは学識豊かな武士たち

で、「数学では彼らを凌駕するほどの米国の大学卒業生はあるまい」と評価されるほどの能力をもっていた。しかし、幕府側は彼らの氏名、身分、職歴、学歴などの紹介は一切ない〈匿名受講者〉であった。この授業は 1863 年初めまで続いたが政情不安により解散している。この委託学生のクラスを〈ヘボン塾〉の流れとするのは大きな間違いである。

3. 居留地 39 番に家を建て、転居

クララの帰米中の 1862 年 12 月 29 日、ヘボンは〈横濱居留地 39 番〉の借地権を取得して家を新築した。この敷地内には住居用住宅と別棟で、施療所、集会所兼礼拝堂も建築した。翌年（1863 年）になるとヘボンの住居を知った人達が施療を受けるために訪ねてくるようになった。そのほとんどが〈役人〉であったという。ヘボン転居の情報をいち早く知ることができるのは、役人であろうから、当然といえよう。この敷地の総面積は 646 坪〈居留地リストより〉であった。

1863 年 3 月 30 日、クララは米国より横濱に戻って来た。新しい住居と施療所集会所兼礼拝堂、そして住居の両側には花壇にできる広さの庭があるのを見て、さぞ喜んだことであろう。彼女は結婚前に教師の経験があるので、この建物を活用して〈女子のための英学教育〉を始める計画をもったと言っても不思議はない。

4. クララのクラスの開校日

クララの計画による〈クラス〉の出発時期については、ヘボン研究の権威者・高谷道男の説では「ヘボン夫人が帰って来て、その年（注 1863 年）の 11 月から林洞海の依頼により、その養子・林董に英語を教授することになり、それ以来いわゆるヘボン塾なるものが設立せられるようになったものとみえる」（人物叢書・ヘボン 92 頁より）であり、これが〈ヘボン塾創設の時〉とされて来た。しかしこの説には〈疑問〉がある。そもそもクララの塾は林董のために始めた塾とは言えないし、クララは女子のためのクラスを計画していたのである。

明治學院五十年史の 102 頁には「ヘボン博士は治療に従事し、夫人は子弟の教育に手を染め始めた。高橋是清氏、林董氏はその頃各々幼童として女生徒と共に夫人の前で洋楽を修めたものである。その男女混淆のヘボン夫人の家塾……」と書かれており、

更に「服部綾雄氏が十歳で横濱に参りヘボン塾に託せられし時は、まだ女学生と一緒に（注一 1973 年頃？）に勉強したものであった。一と述懐している。」と書かれてある。

高橋是清（第 11 代首相）はその自伝の中で「横濱に出てからドクトルヘボンの夫人について英語の稽古をしておった。たまたまヘボン夫妻が日本を離れるようになったので（注一 和英辞典発刊のため上海へ）『バラ』という宣教師の夫人に託していった。」と書いている。クララは英学塾を始めてまだ 3 年強のときなので、休むことはせず上海滞在中（1866 年 5 月より 1867 年 5 月までの間）J.H. バラの夫人マーガレットに塾の授業を依頼していたことがわかる。

1864 年 4 月 4 日付けで義妹のアンナに出したクララの手紙の中に「私はまだ董三郎（注一 林董の幼名）を教えています。生徒の中の 2 人が幕府のヨーロッパ派遣使節一行で随行（注一 幕府は派遣の留学生として 1866 年 12 月に出発）します」と書いており、又、ヘボンの代筆でミッション本部へ出した 1864 年 11 月 15 日付の報告の中には「私の小さな学校（注一 My little school）はとても盛んです」と書いているが、その中に女子生徒が何人いるかは記されていない。そしてその〈小さな学校〉の出発の時も明確に記されていない。クララは米国で教師の経験があるので、たとえば [小さな学校] であっても、それを始めるなら〈新学期の開始月〉の 9 月ではなかっただろうか。従って、ヘボン塾誕生の時を〈1863 年 9 月〉と推理するのである。

歴史を語る際、推理することがたいせつである。複数の信頼すべき情報を基として、その時代の環境を把握した考証で〈仮説〉をたてるものである。この推理により〈ヘボン塾誕生の時は 1863 年 9 月〉と定めることとする。

5. 「ヘボン塾」という名称

現在でも〈横濱居留地 39 番のヘボン邸〉の入口に「ヘボン塾」という表札が掲示されていた一と想像する人がいる。おそらく〈J.C. Hepburn〉という表札も存在していなかったであろう。「ヘボン塾」という名称が活字となって印刷され、登場したのは「明治學院五十年史」発刊以後、明治學院の関連文書に使用され出し、やがて一般的に定着していったものと考えられる。従って「ヘボン塾」とい

う名称の誕生は〈昭和二年十一月・明治学院五十年史発刊のとき〉といえよう。

クララは〈学校—school〉と呼び、ヘボンはその報告書の中で〈妻の家塾—wife's Class〉と記しているが、生徒の数が増えて来ると〈妻の学校〉となり、教師も増えて来ると“our school”とも“the school”などと表現が変化している。

かつて「クララ夫人が始めたクラスなのだから〈クララ塾〉であるべき」と主張した人がいた。ヘボンは Family name なのだから「クララ」でも「カーティス」でも〈ヘボン〉でまちがいないのである。(続く)

「横浜禁酒会の展開における一考察」

清水 秀樹

序

本稿は、禁酒運動の歴史を先行の研究より概観し、横浜禁酒会が禁酒思想の啓蒙のために発刊した「横浜禁酒会雑誌」を基礎資料として、運動の実態を明らかにし、その意義について考察をするものである。

I) 横浜禁酒会の展開

1867年の明治維新後の変革は、社会の各階層に、生活困窮者をもたらし、風紀の乱れも起こった。1858年、開国とともに来日をしたプロテスタント宣教師は、社会の風紀の乱れに対し、伝道への想いを強くし、信仰生活から離れることがないように自分を律する生活の必要を説いた。アメリカ・オランダ改革派宣教師バラは、禁酒を提唱し、次いで、奥野昌綱によって、横浜禁酒会が発足した。横浜禁酒会は、1875年6月に発足し、会に加入した者は、ほとんどがキリスト者であった。会の議長には、大酒飲みで、酒の害を自ら知っているものがよいということで、奥野が就いた。奥野はその後、牧師となり、東京へ転任し、以後、南小柿洲吾が中心的な役割を果たし、住吉町教会、海岸教会のキリスト教徒も多く関わった。会は、1886年以後、林蔭と寺尾亨によって組織化され発展した。会は、主旨に賛同した者を募り、会の入会にあたり、アルコール質の飲料を服用、売買しないこと、他人にも服用させないことを、二名の証人の連名をもって誓約をさせた。また、毎年一月に総会を開くとともに、毎月一

回、第一木曜日に役員会を開き、会務を協議するとともに、毎月一回、会合を開き、禁酒並びに道德、衛生等に関する講演を行った。

会は、未成年者に対する禁酒思想の啓蒙を目的として、少年禁酒会を設立した。少年禁酒会は、1890年、2月3日の定期総会において設立が議決され、林蔭、寺尾亨等が委員として選ばれた。また、総会後の親睦会において、北海禁酒会の会頭であった伊藤一隆が演説をした。少年禁酒会の発会式は、1890年、4月16日、横浜禁酒会第二回大運動会を兼ね、根岸村北方鉄砲場において催され、古荘三郎の祈禱の後、寺尾亨が発会の主旨を述べた。横浜禁酒会設立から、入会した少年の人数は、五十七名で、内訳は、老松学校生徒二十七名、横浜学校生徒七名、英和学校生徒四名、地方会員四名、その他、各学校生徒又は、商家の雇人等により、地方より部会設立の旨、申し込みがあったもの等二箇所あった。

横浜禁酒会は、1891年、会の隆盛とともに日本禁酒会と改称し、各地に支部を設置し、全国的な組織となった。1897年、アメリカキリスト教婦人矯風会よりパリッシュが来日し、全国各婦人矯風及び禁酒会を合同するよう勧められたことを受け、1898年、日本禁酒同盟会を創立することを議論した結果、会はこれに賛同し、上総禁酒会、北海禁酒会、東京禁酒会と合併し、日本禁酒同盟会が創立をした。会は、日本禁酒会の名称を同会に譲り、改めて横浜禁酒会の名称に戻し、同時に各支部は独立をして、日本禁酒同盟会に加盟をした。

II) 横浜禁酒会の意義

明治初期の社会事業は、政府の対策が行き届かず、に窮乏した人々に対し、一部の人々が善意や宗教上の動機から支援の手を差し伸べていた。それは、一時的な保護救済が主なもので、いわば事後的な対応であった。一方、横浜禁酒会は、未成年の飲酒の弊害を訴へ、未成年者の間に禁酒思想の普及を試みるなど、事後的な対応ではなく、予防的な対応を試みた。

横浜禁酒会は、地域に顕在化したアルコールの問題にいち早く目を向け、禁酒思想の啓蒙のために内外の同志を招き、演説会の開催、会誌発行等精力的に活動を続けた。それがやがて、禁酒団体の合同、法制化へとつながっていった。また、道徳的な側面ばかりではなく、医学的な側面からもアルコールの

弊害を訴えた。

今日、日本における酒類の消費量は、戦後の高度経済成長期以降、大きく増加し、とくに女性や若年者のアルコール依存の問題が大きくなっている。1922年に制定された未成年飲酒禁止法は、その後、1947年、1999年、2000年、2001年と四回にわたって法改正が行われ、取締りが強化されている。

明治時代に横浜禁酒会が、事後的な対応に終わることなく、未成年者の間に禁酒思想の普及をはかるなど予防的な対応を試みたという先見性は、時が経つにつれて増している。

シンポジウム

「ヘボン博士を語る」

岡部 一 興

明治学院では、2013年に創立150周年を迎えた。2013年10月18日から12月27日にかけて、横浜開港資料館と明治学院がタイアップして「宣教医ヘボンローマ字・和英辞書・翻訳聖書のパイオニア」展が開かれた。そこで「ヘボン博士を語る」というテーマで、明治学院大学の西晴樹先生と同大学の客員教授である中島耕二先生に登場願って、シンポジウムを計画した。西先生からはヘボン博士と信仰について、中島先生は人間ヘボンを語って頂き、総合司会の岡部からは、はじめに総括的に語り、今までにないシンポジウムにしたいと考えて企画した。

ヘボンの生い立ち

ヘボンの祖先はスコッチ・アイリッシュとあって、スコットランドから北アイルランドに渡り、アメリカ大陸に移住した一団である。教派的にはプレズビテリアン、スコットランドのカルヴァン派の呼び名で、イギリス国教会に反対したので弾圧された。祖先はスコットランドのエディンバラで、かつてボスウェル城主であったパトリック・ヘップバーンまで遡る。そこから7代目、ヘボンの曾祖父サムエル・ヘップバーンの時、ペンシルヴェニア州サスケハンナ川渓谷まで進み、ウィリアムSPORTやミルトン等を開拓した。ヘボンの父サムエルは法律家で母はアンニ・クレイといい牧師の娘、2男6女の長男として、1815年3月13日にミルトンで生まれた。少

年時代、海外伝道に関心を持ち、ジョージ・ジェンキンから信仰的な影響を受け、カークパトリックという優れた教師の教えを受けた。プリンストン大学に進み、総長アシュベル・グリーンから古典の重要性を教えられラテン語やヘブル語を学び、これが後に辞書の編纂、聖書翻訳に役立った。更にペンシルヴェニア大学医科に進み、36年アポプレキシ（脳卒中）の学位論文で医学博士になった。

クララとの出会いと海外伝道

ヘボンがペンシルヴェニア州ノリスタンで開業した頃、助教をしていたクララ・リートと出会い、東洋伝道について語り合ううちに2人は共鳴しあって、1840年10月結婚式を挙げ、翌年7月シンガポールに到着、43年2月頃アモイ対岸のコロンス島でアビールと医療活動を開始したが、妻の病気のため留まることができず、46年3月ニューヨークに帰着、42番街で医院を開き13年間働き市民の信頼を得て名声と富を得た。しかし5歳、3歳、1歳の男の子が相次いで病死、「わたしの胸は、はりさけるほどだ」というほどで、その悲しみは癒えることはなかった。

1859（安政5）年日米修好通商条約が調印され、翌年神奈川、長崎、箱館等が開港されるのを聞くや否や、ヘボン夫妻はミッション本部に日本への渡航を申入れた。44歳という年齢で、なぜ見知らぬ国へ宣教師として行くのかと両親や親戚、友人たちはこぞって反対したが、誰もヘボン夫妻の決心を変えることはできなかった。次男サムエルを友人のヤングに託し、病院と自宅を売却、59年10月17日神奈川沖に到着、翌日米領事ドールの世話で成仏寺を住居と定めた。11月改革派のS・R・ブラウンとシモンズが、60年4月にはバプテスト派のゴープル夫妻が来航し、シモンズは宗興寺に、ブラウンは成仏寺の庫裡に、ゴープルは同じ敷地に小屋を建てて住まった。

施療と『和英語林集成』の編纂

1861年春から宗興寺で施療を始めた。患者が来すぎたこともあって、5ヶ月で閉鎖を命ぜられた。62年12月居留地39番に移転、63年5月に施療を再開した。順天堂の創始者である佐藤泰然とヘボンは親交があった。彼が、ヘボンに脱疽を病んでいた歌舞伎役者の沢村田之助を紹介、米国のセルフオ社から義足を取り寄せ最新の治療をし、他方の足も手

術、異常な精神的状態の中で死を迎えたが、ヘボン夫妻は田之助を常に暖かく見守っていた。

60年に入ってヘボンは、日本人教師を雇い『和英語林集成』の編纂に着手、日本語の研究に磨きをかけ、患者と相對して一つ一つ日本語の言葉を英語に置き換えて、ノートに綴っていった。横浜居留地でウオルシュ・ホール商会のウオルシュが出版費用を立て替えるという援助が整って、夫妻は岸田吟香を連れて上海に行き上海美華書院で印刷、翌年5月に出版、同じ年にロンドンのトリュブナー社から『和英語林集成』のロンドン版が出版され、この辞書の良さが世界中に広まることになる。第三版は86年に丸善商社から出版、助手に高橋五郎があたった。語数は3万5618語に上った。この頃偽版が出たこともあって、版權を丸善商社に譲り丸善は2千ドルをヘボンに贈ったが、ミッションに寄付、それを基に明治学院に三階建てのヘボン館が建てられ学生寮として使われた。『和英語林集成』は9版(1910・明治43)年に及び縮刷版も出た。初版から50年も辞書の寿命が保たれたのは驚くべきことであった。

共同訳聖書の翻訳

ヘボンは『和英語林集成』の編纂は最終目的である聖書翻訳に至る予備的なものと位置づけ、キリスト教を伝えるには聖書翻訳が不可欠と考えていた。1872年には、第一回の宣教師会議が居留地三九番のヘボン邸で開かれた。聖書翻訳については共同訳の聖書をつくることが決まり、新約聖書はS・R・ブラウンを委員長として、ヘボン、D・C・グリーンらが加わり、79年11月に和訳完成した。旧約聖書はヘボンを委員長としてフルベッキ、ファイソン、日本人から松山高吉、井深梶之助、植村正久らが参加し、88年2月築地の新栄橋教会において完成祝賀会を開催した。新約聖書27巻と旧約聖書39巻合わせて66巻のうち、新約聖書の6割以上、旧約聖書の半分近くがヘボンによって訳された。ヘボンとブラウンらは庶民に受入れやすく、文学的にも価値が高い翻訳を目指した。ヘボンは翻訳が完成した時、アメリカの弟に宛てて「それはわたしの学才がすぐれていたというのではなく、与えられた職務の一つに専念し、それを完成するまで、その一事にしがみついて離れなかったという辛抱強さであった」と手紙を書いている。ここには、神の召しによって仕え

る信仰者ヘボンの姿がある。

ヘボン塾に連なった人びと、指路教会の創立

62年9月頃神奈川奉行に依頼されて、ヘボンが大村益次郎、沼間守一など9名の武士を教えた。62年12月には居留地39番に家建て移転してもヘボンから英語を学んでいたが、63年3月頃家塾を一時閉鎖、同年5月から施療を再開、同年秋からクララが英語塾を開始した。クララが始めた塾が明治学院の始まりである。総理大臣の高橋是清、最初の医学博士三宅秀、三井物産を創設した益田孝、日銀出納局長鈴木知雄、牧師になった山本秀煌、服部綾雄等優れた人材を輩出した。また佐倉の医者佐藤泰然の五男信五郎(幼名)を託され、のちに林董と改名して外務大臣になったものなどを輩出した。1870年9月ミス・キダーが、ヘボン夫人の私塾を引き継ぎ、これがフェリス女学院となり女子教育の先駆となった。1876年施療所を閉鎖、ヘボン塾はジョン・バラに引き継がれた。ヘボン夫妻は最後に立派な教会堂を横浜に残したいと考え、サルダの設計により指路教会の建設が進められ、1892年1月献堂式が行われた。そしてこの業を成し遂げてヘボン夫妻は、この年の10月に帰国の途に着いた。

このようにヘボン夫妻が、わが国にもたらしたものが何と多いことか。施療によって庶民の病気を治療し、『和英語林集成』の編纂とヘボン塾の開塾によって、英語という言葉が日本に広まる切っ掛けをつくり、のみならず近代日本における文化と学術に大きく貢献した。また共同訳聖書の翻訳によって、日本にキリスト教の福音をもたらし、指路教会を建て、明治学院の創設に関わるなど、その足跡は高く評価される。

シンポジウム

「ピューリタン・ヘボン」

大西 晴樹

近年のヘボン研究において、主な関心は「聖人ヘボン」から「人間ヘボン」に向かっている。原因としては、研究の基礎資料をなすヘボン書簡の翻訳を在日期间の全書簡、及び来日前の東洋伝道の時期や帰国後の時期を対象とすることによって、栄光のみならず苦悩をも含むヘボンのトータルな人間像の再構築を目的としているからである。「聖人ヘボ

ン」は、高谷道男著『ヘボン』吉川弘文館、1961年によって確立するが、その先駆は、W. E. Griffis, *Hepburn of Japan, and His Wife and Helpmates: A Life Story of Toil For Christ*, Philadelphia, 1913. (邦訳高谷道男監修・佐々木晃訳『ヘボン』教文館、1991年)であった。著者グリフィスは、幕末維新の日本に理化学教育のために4年間「お雇い外国人」として滞在し、改革・長老教会から派遣されていたヘボン、ブラウン、フルベッキと親しく交わり、ヘボン以外にもブラウン、フルベッキについての伝記を上梓している。だが、不思議なことに、1900年に出版されたフルベッキ伝、1902年のブラウン伝と異なり、1913年に上梓されたヘボン伝については、「信仰的、内面的な要素」が強調されていることに気づくのである(拙稿「米国長老・改革教会宣教師ヘボン、ブラウン、フルベッキの功績」明治学院大学キリスト教研究所編『境界を超えるキリスト教』教文館、2013年、参照)。グリフィスは「ヘボン伝」の緒言において、ヘボンの辞典編集、聖書翻訳、医療奉仕等の顕著な業績について列挙した後で、このように述べている。「これらすべては、外側の困難に対して得た彼の勝利であったが、博士の主たる勝利は自己の克服であった。ヘボン博士には、例えば韓国のアペンゼラー、日本のフルベッキ、「新しい東洋の創始者」S. R. ブラウン等に見られるような気質は見られない。……ヘボンの場合は、その気立ての点では非常に用心深かった。奉仕に関しては驚くほど精励で、かつたえず自己に厳格であった」(グリフィス、前掲邦訳、16頁)。その原因が、ヘボン自身の神中心主義的な敬虔な信仰にあるのか、ブラウン伝、フルベッキ伝とヘボン伝との中間に刊行されたマックス・ヴェーバーの有名な論文「プロテスタンティズムの倫理と資本主義の精神」(1905-06年)の影響によるのかという問題はさておき、まずは「聖人ヘボン」の先駆となった「ピューリタン・ヘボン」の特徴を述べてみたい。

ヴェーバーは「プロテスタンティズムの倫理と資本主義の精神」において、近代の英米における禁欲的なプロテスタントの倫理が合理的で市民的な資本主義の精神といかに関連しているのかについて言及した。二重予定説、すなわち、神は「予め人間を選びと滅びに創造し給うた」というカルヴィニズムの

救済説は、人間は行いによって選ばれることはないが、選ばれ恩恵の地位にあることを自ら証明(proof)することはできるという確信を人間に与えた。そのため、人間は、無駄なおしゃべりをやめ、一秒一刻を大切に、職業を神から与えられた召命(calling)として勤勉な禁欲的労働に邁進するのである。それが近代資本主義に影響を与えたピューリタンの精神的推進力であった。またカルヴィニズムがもつ神の絶対的主権の考え方から、人間による「被造物神化の拒否」が徹底し、現世における身分や地位の相違を超越した神の前における「人間の平等」の論理が出てくる。すなわち、私たち現世の人間は、身分、地位、国籍、収入、身長、学歴、成績等、あらゆる尺度で「人を分け隔て」(in respect of persons)しているが、カルヴィニズムの神は選び以外の問題で、「人間を偏り見られることはない」(God is no respecter of persons)公平無私の神であった。そこに市民社会の基盤をなす市民的合理主義の宗教的根拠があるとウェーバーは主張するのである。

ヘボンの確信に満ちた、敬虔な信仰は、ウェーバーが描いた禁欲的なピューリタンのそれであった。グリフィスは、若きヘボンが東洋伝道に妻クララと苦勞して向かう航海日記を引用している。「主の僕になる決意をして以来のこの6年間でさえ、どれだけ多くの時間が誤って費やされてきたことか。不信仰、墮落、世俗の誘惑の故に無為に費やしてきた時間、無意味な会話、愚かでごしまな心の思い、怠惰な生活の営みの中で無駄に過ごしてきた全ての時間を差し引いたら、一体どれだけの時間が残るであろう」(グリフィス、前掲邦訳、36頁)。ヘボンにとって、信仰に堅く立つことは、すなわち、勤勉であることと同義であった。高谷によれば、ヘボンの暗誦聖句はコリント第1の書15章58節「主の業に常に励みなさい。主に結ばれているならば自分たちの苦勞が決して無駄にならないことを、あなた方は知っているはずである」であった。ヘボンは、「主の業」すなわち、神から与えられた「召命」に常に励むことが何がしかの結果を産み出すことを、この聖句を用いてヘボン塾の初期の塾生に教えたのである(高谷、前掲書、195頁)。

さて、禁欲的なプロテスタンティズムがもたらしたもう一つの側面、神の絶対主権の強調から生まれる

「人間ヘボン博士」

中島 耕二

はじめに

ヘボン博士（以下ヘボン）の人となりを端的に言い表しているのは、ヘボンが日本に出発する時に、友人の銀行家キルマン氏夫人の発した次の言葉であろう（佐波亘編『植村正久と其の時代』復刻版 第一巻、教文館、1976年 p258）。

日本の宣教は大切には相違ない、第一流の人物をも必要であろう。しかし、ヘボン氏ほどの高潔堪能な紳士を送る必要が果たしてあるだろうかと疑わざるをえなかった。

この時、ヘボンは44歳であったが、如何にしてこの年齢で友人たちからこのような評価を受けるに至ったのか。「人間ヘボン博士」の人格形成の過程を、その生い立ちに着目して解明を試みたい。

1. ヘボン家のアメリカ移住

ヘボンの曾祖父サムエル・ヘップバーンは、1698年にグラスゴー近郊に生まれ、若くして蓄財に成功したが、宗教上の迫害に遭い、1750年前後にスコットランドからアイルランドのドニゴール州に妻のジャネットと共に移住した。同地で四男一女を得たが、更なる宗教上の自由とビジネス・チャンスを求めて、アメリカへの移住を計画した。

1773年に26歳の長男ジェームスと18歳の二男ウィリアムスが、事前調査のためアメリカに渡った。彼らはペンシルバニア州のサスケハナ渓谷一帯を調査し、その自然の美しさとビジネスにおける地理上の優位性に満足して、その旨父のもとに報告した。これを受けてサムエルは、三男サムエル Jr. と四男ジョンと共にロンドンデリーを出航し、フィラデルフィアに上陸した。この時、サムエルはすでに75歳になっていた。その後、四男のジョンは父の命を受けて、アイルランドに残っていた母親と姉を迎えに行った。彼らを乗せた船がニュージャージー州沿岸に達したところ、突然暴風雨に遭い座礁し沈没した。この時、ジョンは助かったが、母と姉の二人は溺れて命を落とした。ヘボン家のアメリカ移住には、こうした悲しい歴史が秘められていた。

「被造物神化の拒否」は、ヘボンにどのような態度をもたらしたであろうか。グリフィスは、「神を中心に生きる自己の内奥にのみ人生の価値を見いだそうと試みた博士は、寛大な態度で、見解を異にする人々に接しつつも、目まぐるしく変遷する時代とともに変貌する思想に対しては全く関心を抱かないように見えた。無学な人、自尊心の強い人、血気にはやる者にもけって高圧的な、尊大な態度をとらず、何時も医者にふさわしい態度で接していた」（グリフィス、前掲邦訳、16頁）ことを指摘するのである。ヘボンが宣教医師として、武士町人の身分や貧富の格差を超えて無償で施療し、その患者達をはじめ、ヘボンと日本語のやり取りを重ねた日本人を「生ける教師」（the living teacher）として辞典づくりに励んだことこそ、ヘボンが人々を公平に扱ったことの証左だといえよう。

近年のヴェーバー研究において、「禁欲的プロテスタンティズム」をめぐる論争が交わされた。一方は、「禁欲的プロテスタンティズム」の中に、抑圧的な「反人間性」（unmenschlichkeit）が内包されていると批判するのに対して、他方は、「禁欲的プロテスタンティズム」の「非人格性」（unpersönlichkeit）がいかに公平な市民社会の形成に貢献したかという点において、ヴェーバーを擁護したのである。この論争に注目するのは、グリフィスが次のように述べているからである。「ある人はヘボンを評して「人情のない冷たい宣教師」（a cold-blooded missionary）と言った。けれどもそれは言いながらも彼らは無意識のうちに敬意を払わざるをいられなかった。というのは、活力をやたらに感情や感傷で発散する人とは異なり、「無駄な感情」（ineffectual emotions）に対して非情な博士は極めて冷静であったからだ」（グリフィス、前掲邦訳、37頁）。「人情のない冷たい宣教師」という指摘は、グリフィスのいうように、ヘボンの冷静沈着な態度を表現した言葉とだけ見なすことはできない。ヘボンの人生の足跡を振り返ると、ヘボンが常に「聖人ヘボン」であったわけではないことに気づく。そこには、息子サミュエルや在日女性宣教師たちとの確執等「ピューリタン・ヘボン」に固有な栄光と苦悩が絶えず伴っていたのである。

2. アメリカにおけるヘボン家の隆盛

サムエルの息子たちは皆商才に長け、長男のジェームスは不動産業を営み、サスケハナ溪谷のノザムバーランドを中心に膨大な土地を所有し大資産家となった。また、人望も厚く州知事の推薦により地区の治安判事を長く務めた。二男のウィリアムスもウィリアムSPORTを拠点に製粉業、醸造業、不動産業に成功し大資産家となり、また州知事推薦でペンシルバニア州判事を務めた。ウィリアムSPORTの町名の由来も、ウィリアムスの名を冠したと言われている。

三男のサムエル Jr. も、ミルトンの町を中心に不動産業や雑貨業を経営した。ちなみにヘボンの父サムエルがミルトンに住み、ヘボンがこの町で生まれたのは、この大叔父との関係からである。また、彼らは父サムエルに劣らず、敬虔な長老教会信徒として熱心に奉仕活動に従事した。この時代のヘボン家は、「大資産家かつ敬虔な長老教会信徒」と特徴づけられる。

3. 父サムエル

ヘボンの祖父ジェームスは六男三女を得、長子で長男のサムエル(1782~1865)がヘボンの父となった。父には8人の兄弟姉妹があったが、父を含め3人が弁護士となり、3人が弁護士夫人となった。父サムエルはプリンストン大学在学中に弁護士登録をし、1803年に同大学を首席で卒業すると、ほどなくミルトンの町で二番目となる弁護士事務所を開いた。1811年に聖公会牧師スレーター・クレイ(1754~1821)の娘アンニと結婚した。ヘボンはグリフィスに「母は牧師の娘であり、信仰の導き手であった」と語っている。

父の性格は誠実で温和であり、派手な社交は好まず、職業柄政治との接点も多くあったが、議会を目指すといった野心はなかった。またミルトン長老教会の長老として長年奉仕した。このように父サムエルを見てくると、ヘボンの性格形成にかなり影響を与えたことが分かる。さらに言えば、ヘボンの性格は父から引き継いだと言っても良い。

4. ヘボン家の人々

ヘボンは17歳でプリンストン大学を卒業し、進路を決めかねている時、医学に進むきっかけを与え

てくれたのが、サムエル・ポロック医師であった。彼はヘボンより4、5歳年長で、ヘボンに自分の母校ペンシルバニア大学医学部進学を勧めた。実はヘボンの縁者には医師も多くいて、身近ではアンドリュー叔父の息子ジェームス(ペンシルバニア大学医学部1823年卒)やウィリアムス(同、1835年卒)がいた。ウィリアムスとは歳も一緒に、ペンシルバニア大学の在学期間も重なっているの、互いに影響し合ったと思われる。その他、ヘボンと同世代の従兄弟・従姉妹には、医師夫人、弁護士や同夫人となった人々が数多くいた。彼らも有形無形にヘボンの人間形成に影響を及ぼしたに違いない。

ヘボンは姉一人、弟一人および妹5人の8人兄弟姉妹であったが、2歳違いのすぐ下の妹サラはサムエル・ポロック医師の弟のジェームス・ポロックと1837年に結婚した。ジェームスはペンシルバニア州最高裁長官、ペンシルバニア州知事、連邦議会上院議員、連邦造幣局長を務めた。4歳下の弟スレーターは父の希望に応じて長老教会の牧師となった。7歳違いの妹メアリーは、弁護士からロックヘブン銀行頭取となったルイス・マッカーと結婚した。10歳違いの妹エンマは意に反し海軍士官と結婚したが、ヘボンは妹に同情を寄せている。15歳下の末の妹ジェーンは医師と結婚した。ヘボンは兄弟姉妹およびその伴侶たちとの交流を積極的に行っていたので、お互いに感化を及ぼし合ったと思われる。

5. 恩師・学友・同僚たち

ヘボン自身が語った、「人生に影響を受けた人々」は以下である。

- ・少年時代は、母アンニと謹厳で信仰篤く、善事を行うことに熱心なジョージ・ジェンキン牧師。
- ・ミルトン・アカデミーでは、友人のリチャード・アームストロング、エディンバラ大学出身のデビット・カークパトリック校長。
- ・プリンストン大学では、アルバート・B・ドッド教授、J・アディソン・アレキサンダー、友人のマシュー・レアード、それにアシュベル・グリーン学長。
- ・ペンシルバニア大学ではマシュー・B・ホープ。友人のアームストロング、レアード、ホープらは宣教師になったが、ヘボンは「彼らとの信仰を通して受けた影響が私の心をいつか外国伝道へ向けたのです」とその影響を証言している。

6. クラリッサ・マリア・リート

ヘボンの人生や生き方に大きな影響を与えた一人は、妻となったクラリッサ・マリア・リート (1818~1906)、つまりクララ夫人である。クララの生家は、1639年にイギリスからコネチカットに入植し、植民地時代のコネチカット州第22代知事を務めたウィリアム・リートの子孫で、代々ニューヘブーンに近いギルフォードに住み、大地主として富裕層に属していた。また、一族は聖公会の信徒として教会奉仕に熱心な家系であった。

クララは1818年7月25日にコネチカット州ギルフォードで生まれ、2歳の時に妹が生まれると同時に母のサラを失くした。父のハービーはほどなくして、ノースカロライナ州ファイアットビルに移住し、クララが5歳の時に同地で再婚した。父は事業に成功し町の名士となり、また聖公会から長老教会に教会籍を変え、亡くなるまでファイエットビル第一長老教会の長老として奉仕した。クララもこの教会に所属し、故郷を離れるまで礼拝に通い、そしてのちにヘボンとの結婚式もこの教会で挙げた。

クララはファイアットビル・アカデミーを卒業すると実家を離れ、従兄弟が校長を務めるペンシルバニア州のノリスタウン・アカデミーの助教となった。彼女はこの町で、当時診療所を開き海外伝道に行くべきか留まるべきか日夜悩んでいた青年ヘボンと、出会うことになる。

おわりに

本稿では、「人間ヘボン博士」の人格形成に影響を与えた青少年期に出会った人々について概観したが、もちろん、成人後に影響を受けた人々も多く存在する。今後、今回の検討を踏み台に「人間ヘボン博士」の人格形成過程をさらに究明して行きたいと思う。

参考文献：John F. Meginness, “*Genealogy and History of the Hepburn Family of the Susquehanna Valley. With reference to other families of the same name*”, Williamsport, PA: Gazette and Bulletin Printing House, 1894.

『日本バプテスト同盟に至る日本バプテスト史年表』を出版して 1860~2005年

原 真由美

『歴史は過去の記録であるが、同時に将来の指針でもある。』とバプテストのリーダーであった千葉勇五郎が語っているように過去から現在を、そして将来へと視線を向けるために、今を貴重な時としたい。海老坪眞 2014年1月18日の横浜プロテスタント研究会で、2013年3月31日に日本バプテスト同盟が発行した『日本バプテスト同盟に至る日本バプテスト史年表 1860~2005年』について、横浜指路教会で行った海老坪眞師、原真由美の発表をまとめてみる。

1. バプテスト派の宣教(前史)

バプテスト派の東洋伝道の歴史は、イギリスのバプテスト海外宣教協会伝道会の「近代宣教の父」とも言われているウィリアム・ケアリーがインドへ赴いた事に始まる。

アメリカからは、ケアリーに触発されたアドニラム・ジャドソン(会衆派からのちにバプテスト派となる)が、インドへやって来るが米英の外交関係事情や、イギリスの植民地政策から活動拠点をミャンマーへと移し、ミャンマー語の辞書と聖書の翻訳を行う。日本で宣教活動を行ったネイザン・ブラウンは、若き頃、ミャンマーへ派遣されジャドソンとの宣教活動を通し、インド・アッサム語の習得と聖書の翻訳を行った。20年の活動の後、健康をそこない、帰国を余儀なくされるが、65才となった1873年に日本の開国の宣教の扉が開かれ来日する。日本語の習得と聖書翻訳を試み、1879年8月1日に『志無也久世無志与』の新約全書を1880年の翻訳委員会訳に先駆けて刊行している。

このような経緯より日本のバプテスト派の宣教が展開されていくが、その歴史史料としては、高橋楯雄著『日本バプテスト史略 上. 下』と写真を中心として目でみる宣教一世紀の足跡をまとめた『日本バプテスト宣教百年史』のみで、日本バプテスト同盟系列のまとめた歴史資料を求める声が大きくなっていった。そこで1997年の日本バプテスト同盟の第40回総会でバプテスト日本宣教130周年の記

念事業の一環として「日本バプテスト史」の編纂、出版が緊急動議として提案決議された。バプテスト同盟のアイデンティティの確立と伝道の伸展、教育の拡充に寄与する年表の作成が宣教130年を見据え編纂をする事が決定された。

計画当初、通史編（バプテスト日本宣教130年の歴史を概観）、個別編（同盟加盟の教会・伝道所、協力団体の歴史を概観）、資料編（総会や理事会の議事録等の資料）の3部構成を想定していた。しかし、通史編と個別編については、各担当者が資料収集と執筆作業を進めていたが、進捗状況がはかばかしくなく、2003年4月の委員会で「130年史」の形態について編纂方式を年表形式に変更し、現在の形とした。

膨大な文書や書類等を編集委員の海老坪眞、和泉富夫等が3年かけ資料として利用できるように整理作業を行った。バプテストの歴史を研究分野としている松岡正樹は、多岐にわたる資料をもとにバプテスト全体の動向、部会、教会、協力団体、個人に関する情報で一次原稿を作成した。アメリカ・バプテストの宣教師の動向については、この5月に離任する宣教師ロバータ・ステイブンスがアメリカペンシルバニアのヴァリフォージ本部事務所蔵の宣教師カードをコピーし、日本における宣教師史料としては、機関誌グリーンングス『Gleanings』（英：落穂ひろい、集録の意）を用い、宣教師の詳細な出入国年月日、任地等を年表に記録している。（尚、スウェーデンバプテストの宣教師も共に記載）。

2. 担当区分、担当者及び参考資料

1860～2003年 第一原稿作成 松岡 正樹
1860～1927年 松岡 正樹 原 真由美
1928～1957年 海老坪 眞 原 真由美
1958～1987年 宍戸 朗大 原 真由美
1988～2005年 原 真由美
アメリカ・バプテスト宣教師、スウェーデン・バプテスト宣教師関係 ロバータ・ステイブンス
顧問 大島 良雄
主要参考資料 記録
日本浸礼教会組合総会議事録、日本バプテスト教会総会記録、日本基督教団総会記録
東部バプテスト総務委員会記録、バプテスト伝道社団記録、日本基督教団新生会記録
キリスト教新生大会記録、基督教新生社団記録、日

本バプテスト同盟総会議事録

『基督教報』『新生』『日本バプテスト教報』『JAPAN BAPTIST』『まじわり』『福音丸新報』 他
アメリカ・バプテスト関係

宣教師カード、『CONFERENCE OF BAPTIST』
『ANNUAL REPORT OF JAPAN』

『JAPAN BAPTIST ANNUAL』 宣教師機関誌
『GLEANINGS』 他

3. 通史編

通史編はアメリカ自由バプテスト伝道協会のジョナサン・ゴープルが来日した1860年から2005年の歴史を記している。1940年までに日本バプテストのうち大別して九州以外の日本国内（含む沖縄）で組織活動していたのが現在のバプテスト同盟に連なる東部組合である。なお、組織名としては、名称変更を数回している。

- 1) バプテスト全般 1860～1900
 - 2) 日本浸礼教会組合 1900～1917
 - 3) 日本バプテスト教会東部年会 1917～1940
 - 4) 日本バプテスト基督教団（のち東部組合）
1940～1942
 - 5) 日本基督教団、日本基督教団第4部会、日本基督教団新生会（のち基督教新生会）
1941～1958
 - 6) 日本バプテスト組合 1955～1958
 - 7) 日本バプテスト同盟 1958～2005
- 年表は、次の区分に分け、主な出来事を記述した。

- 8) 全国の年会、大会、総会の議事録、記録の要旨。
- 9) 東北、関東、関西、内海の4部会についての記録。
- 10) 教会、伝道所、協力団体、学校、個人についての記録。＊なお、各年の主要な出来事を世界・日本・キリスト教界にわけ、記載し年表の理解を容易にするようにした。

このたびの年表出版の反響は当初、静かなものであったが、教会資料が現存しない100周年を迎える教会から設立年月日の確認を求める声に対応できているのは、うれしいばかりである。「年表」がこれまでの過去を学び、現在を検証し、将来を展望するために用いられれば、これに勝る喜びはない。

さらに、資料編として「宣教師名簿」「日本人教師名簿」「教会・伝道所変遷史」「バプテスト関係出版物」「バプテスト関係資料」を春の完成に向けて作成中である。今後役に立てることが出来れば幸い

である。

日本バプテスト史年表」を出版して：パートⅡ

海老坪 眞

I：日本バプテストの組織変遷

A：1940年頃迄バプテストは九州を西部組合（現：日本バプテスト連盟）、九州以外を東部組合（現：日本バ

プテスト同盟）として連絡しながら東・西合同の声もあったが出来なかった。1939年5月に東部は年会で二人の指導者が「本年4月に公布した宗教団体が施行した時を前提に宗教局の話を取り次いで、今の内に教団規則を持参して申請を行えば簡単に承認するが、団体法施行後は文部大臣の監督を受け認可困難の虞れがあるので、速く組織したい」と提言した。宗教団体法第一条に「宗教団体トハ神道諸派佛教宗派及基督教」と明文化されたが過去2回の提案では「神道、佛教」で基督教は法外、今度は神道・佛教と同列の法になった。この法を有難く受容したのが基督教だった。1940年1月に東西組合は「日本バプテスト基督教団」を立ち上げた。

B：規則を文部省に提出した処、訂正を指摘され、引き下がって再び訂正案を持参したが、更に指示され、繰り返す事7回、最初の75条が402条に迄なった【ガリ版、謄写版印刷した七種類の規則が日本バプテスト同盟事務所の資料棚に保存されている】。その頃に政府からの難問「50教会・5000人信徒」以上でなければ団体認可せぬと。我がバプ教団はその条件を満たしていたが、小教派・小教団は宗教結社に留まらざるを得ない実情を政府から指摘され、彼らを見捨てず大同団結したのが日本基督教団である。その大同団結で組織された日本基督教団は取り敢えず様々な教派の合同なので「部制」制度をとり、我がバプ教団は第4部に属した。

C：大東亜戦争無条件降伏後、日本基督教団成立に矛盾を指摘する群れが教団を離脱し始め、西部バプ組合系が離脱したのが日本バプテスト連盟。東部バプ組合系は1948年に日本基督教団新生会を組織。1951年に「共同教会」「権能行使」を再考して欲しいと日本基督教団当局に交渉討議すること5回、結果は平行線に終わった。遂に煮えきらぬ教会は離脱し始め、極端な教会は日本バプ連盟に

移行したので、1953年に改名改組して「基督教新生会」とした。1954年に基督教新生会は離脱希望側と日基教団に協力共生側とで「新生会綱領宣言」を作成して相互の交わりの絆とした。その頃迄に離脱した教会・伝道所が10指を越え、1955年5月「日本バプテスト組合」を結成した。少数とは言え教派の誕生である。一方、1958年頃迄に離脱した教会・伝道所も10指を越えた頃、日本バプ組合と大同団結したのが「日本バプテスト同盟」誕生で、敗戦後日本基督教団を離脱して立ち上がった諸教派の中で日本バプテスト同盟誕生は31番目、以後には僅か二、三の教派結成があったのみ。

Ⅱ：神学校の変遷（伝道者養成）⇒余白も少ないので時系列のみを既述する。

1879年⇒A. Aベンネット来日間もなく私塾（聖風神学校）開設（聖書講解と説教）。

1884年⇒山手75番に横浜バプテスト神学校設

1910年⇒日本バプテスト神学校（東西合同）設立。

1919年⇒東京学院神学部設立。1927年⇒中学関東学院に東京学院神学部が移行：関東学院神学部設置。

1936年⇒青山学院神学部に依託時代。鈴木正久や

池田鮮等と親しくなる。

1940年⇒田園調布神学寮を用いて（新）日本バプテスト神学校開校（校長は千葉勇五郎）。

1943年⇒日本基督教団：日本東部神学校（後に日本基督教神学専門学校～東京神学大学）へと吸収合併。

1908年⇒バプテスト女子神学校（大阪市淀川区）。

1951年⇒関東学院大学基督教研究所（キリ研と略称）設置。伝道者養成事業再開（所長は川口卯吉）。

1959年⇒関東学院大学神学部（部長は中居京～清水義樹）。1962年⇒神学部大学院開設。1973年⇒廃部。

1974年⇒日本バプテスト同盟宣教研修所開所（関東学院大学校舎借用）。

1996年⇒宣教研修所を日本バプテスト神学校（校長は加納政弘）と組織替え。

1997年⇒戸塚区汲沢に神学校兼戸塚伝道所献堂式⇒現在に至り、本年は神学教育130年である。

～～～その他の特筆したい事柄～～～

①：1870年代後半から⇒バプテスト独自の「教会の約束」を引継ぎ尊重している。

②：1899年末から⇒瀬戸内海での福音丸伝道に

よっての内海の諸教会。

③：1992年⇒総会で「戦争責任悔改め」案は101名賛成・反対3名で可決。資料集出版・紙芝居製作等。

④：2014年⇒宣教師ゼロ時代に突入。

「キリスト教文化功労賞」

大島良雄先生受賞

2013年10月、第44回キリスト教文化功労賞に当研究会の大島良雄先生が輝き、顕彰式が10月21日銀座の教文館ウェンライト・ホールで行われました。今回の受賞は大島良雄先生をはじめ、齋藤正彦、前田ケイ両先生に与えられました。この賞は、日本キリスト教文化協会が75歳以上の男女で、キリスト教関係の出版・教育・福祉事業などに長年にわたり貢献した方に対して、キリスト教功労者として顕彰するものです。先生、受賞おめでとうございます。

2013年11月9日付の『キリスト新聞』と先生の著作の奥付けによりますと、大島先生は、1919年東京都出身、41年関西学院専門部英文科、43年同大学法学科、54年バークレー・バプテスト神学校卒業（MD取得）。同年仙台尚綱女学院中高・短大宗教主事、1960年関東学院に転じ、同年大学専任講師、大学宗教主事に就任、助教授、教授になり、83年から定年まで学院の宗教主任を務めました。その後98年まで日本バプテスト神学校講師として関わりました。

この間にW・バークレーの『イエスの生涯』I、II、同『信仰のキリスト』I、II、同『イエスと弟子たち』、同『新しい人生の創造』、以上新教出版社、同『マルコ福音書』「ヨルダン社・以下ヨルダン社は（ヨ）」の翻訳をし、次々に出版しました。また『日本につくした宣教師たち』（ヨ）、『灯火をかかへて』（ヨ）、『バプテストの東北伝道』（ダビデ社）、『バプテストの水戸・平伝道』（ダ）、『バプテストの横浜地区伝道』（ダ）、『バプテストの東京地区伝道』（ダ）、『バプテストの瀬戸内海福音丸伝道』（ダ）、『バプテストの大阪地区伝道』（ヨ）など、

American Baptist Missionary Unionから派遣された宣教師の活動を克明に記述した大作を手掛けたことはよく知られています。先生、健康に留意されまして研究を楽しんで頂きたいと思っています。

（岡部一興）

研究発表リスト（その37）

第350回 2013.10.19 清水 秀樹

「横浜禁酒会の展開における一考察」

第351回 2013.11.16

明治学院歴史資料館主催、明治学院大学キリスト教研究所・横浜プロテスタント史研究会共催

シンポジウム：「ヘボン博士を語る」大西晴樹、中島耕二 総合司会 岡部一興

第352回 2013.12.21 一色 義子

「河井道をめぐり、フェミニスト神学史から瞥見して」一色義子

第353回 2014.1.18 原 真由美・海老坪眞共同発表、『『日本バプテスト同盟に至る日本バプテスト史年表』1860-2005年』を出版して」原真由美

「日本バプテスト史年表」を出版して 海老坪 眞

第354回 2014.2.15 鈴木 進

『『和英語林集成』の成立過程—「ヘボン自筆ノート」から初版出版へ—

第355回 2014.3.15 岡部一興

「事業家長谷川誠三の信仰と事績」

《編集後記》

編集後記に余白ができたので、少し語らせて頂きたい。2013年12月26日安倍総理が靖国神社に突如参拝、中国、韓国が批判、オバマ大統領も不快感を表明した。靖国神社は1869年の東京招魂社に始まるが、更に辿ると62年孝明天皇が長州藩の内諾によって、非業の死を遂げた尊攘志士の招魂弔祭を命じ、国事殉難者として讃え、同年12月京都東山霊山で最初の招魂祭が行われた。64年高杉晋作の騎兵隊の戦没者の魂を慰め、讃え隊員がさらにあとに続いて死ぬことを誓うようになった。戊辰戦争では、「官軍」は弔うが、会津激戦で死んだ兵士は「賊軍」で祀らない。従って、靖国神社は追悼施設ではなく、戦死者を讃える顕彰施設なのである。靖国神社には245万人もの人々が祀られている。

問題は日本軍の戦争によって、日本軍戦没者の他に、日本国内はもとより日本国外に膨大な数の死者・被害者がいることである。そこに目をやらずに、日本の植民地支配で数知れない死者と被害をもたらしたことを問うことなしに「靖国」だけに留まることは内外からの批判に耐えられないのは当然である。歴史認識を新たにして、アジア諸国との友好関係を重ねることこそが大切なのではないか。（岡部記）